仏陀説法の保存をめぐって——仏教の諸問題——

NO 阿 理生

[1] 現存パーリ経・律の三蔵や漢訳四阿含その他が，どれほど仏陀のお言葉（Buddha-vacana）を保存し，いかほどその真意を伝持しているかは，仏教の根幹に関わる重要諸問題の一つである。

今日まで国内外の研究者たちは一様に《仏陀の説法は聴かれて弟子たちの記憶に保存され口授によって後世に伝えられた》，そしてまたパーリ聖典については《前1Cのスリランカ王ヴァッタガーマニの治世に諸註釈とともに初めて筆録された》というような通説に従っている。それはほとんど盲目的信に近い。

本発表ではあえて仏陀説法の保存の仕方を問題としてとり上げてみたい。

[2] 仏陀説法の保存の仕方は，(a)記憶 (b)筆記の二種の可能性にしぼられる。(a)はまた(a-1)話し言葉（口述）通りの記憶保存と，(a-2)説法の要約（散文的短文や偈文）による記憶保存，(b)はまた(b-1)要点筆記と，(b-2)口述通りの筆録（いわゆる速記）に分類される。

一般弟子の日常は，(a-2)や(b-1)の可能性に収まるが，サンガにとっての経・律三蔵の成立には(b-2)が最も有効であり必要であると考えられる。なぜなら，今日における脳の記憶の仕組みに関する科学的知見によって，(a-1)の可能性は最も低く，もしあっても保存内容には混乱や脱落がありうる，現存パーリ経蔵には長短合め数千以上の経が収録され，説法年数も数十年にわたること，そこには数千に及ぶ人名・地名の記録があり，縦横無尽の問答のやりとりが細かく記録されている，などの点から，少くとも経蔵成立には，(a)の記憶による可能性よりも(b)の筆記の可能性が遙かに高い。しかし(b-1)の要点のみの筆記では，口述通りの再現が困難ないし不能である。パーリ経蔵を読む限り，そこには現実感・臨場感があふれ，要点のみの(a-2)や(b-1)からの再生ではなく，口述の現場における筆録（速記）のみがなしうる特徴が表われている。

[3] 筆記（速記）の文化的背景・環境を見てみよう。

経や律蔵中に，文字を書く書術は計算・算術とともに仏陀在世時の社会における尊貴で主要な教養科目の一つであったことが知られる。ジャータカでも，バラモンが書を取出して偈を唱えたり，菩薩が裁判記録を書かしめたりする記述がある。仏滅後百年ほどのアショーカ王法勅文も読み書きの普及を背景とする。また『ミリンダ王問経』にも巧みな書記（速記者）の記述があり，また何よりこの経自身が速記に基づく書である。これと相前後するカウティリヤ『実利論』にも記録文書への言及がある。仏陀当時の社会が決して無文字社会でなく充分に成熟した文字文化の中にあったことは，メソポタミアのアッシリアの都ニネヴェにおけるアッシュルバニパル王の図書館（前7C）の存在やギリシャのクセノフォンによるソクラテスの口述筆記の出版や，クセノフォンやアリストテレスに捧げた言葉の速記碑文（ともに前400年代）などの存在を視野に入れる時，率直に了解されうる。

[4] 人の曖昧な記憶よりも確実な文字記録は，政治や経済その他の分野で遙か以前から利用されていたのである。成熟した文字文化の環境の中で，仏陀の説法も筆記（速記）されたことであろう。

説法内容を誤解して記憶していてサンガで問題となったアリッタ比丘やサーティ比丘のような者の出現も記録の重要性を関係者に認識させたことであろう。パーリ『大般涅槃経』の「四つの大事な引例」において，ある比丘がまのあたり聞いたと語るところの法と律が世尊の言説内容と合致するか否かを判定する基準として，「経（sutta）と比較し律（vinaya）に参照すべきである。」と仏陀は対処法を示す。［この記事はSkt.本にも漢訳二本にも存在］判定基準となる経や律はあくまで文字化された記録であって，アーナンダやウパーリの記憶内のものではない。仏陀の遺言として語られる所の「アーナンダよ，汝らに私によって説かれ告知された法と律とが，それが汝らにとって私の死後，師（satthar）である。」という言葉にも，文字で記録されたサンガにとっての公文書的な法（＝経）と律とが存在していたことを推知させるに充分である。

[5] 仏陀釈尊の入滅に至るまでの二十五年間侍者だったアーナンダは多聞であり記憶力もすぐれていたことが知られるが，彼が大迦葉の提案で開催された第一結集（五百結集）に法の誦出のために有学の身にかかわらず指名されたのも，多分仏陀説法の書記の役割を長年担ってきたからであろう。上座にまじって有学のアーナンダもāyasmanの尊称を有している。

āyasmatはSkt. āyuṣmatであると今日まで諒解されているが，実はPāliのāyasmatは《鉄（筆）を有する者》が原義であり，《書く能力ある（読み書きできる）教養あるすぐれた者》を意味する。狭義には《書記》となるであろう。

さて，月日を重ねるごとに増えていく速記録は保管が必要である。アーナンダが「大仙人の蔵を守る者」とか「法の財物庫管理人」とも呼ばれるのは，記録文書の管理者でもあったことを意味する。保管場所はどこかと言えば，それはサンガを統率する仏陀釈尊の居室であるGandhakuṭīであろう。今までその語は「香室」と訳出されてきたが，正しくは，文書類を保管する「書庫」（Skt. granthā-kuṭī）の意味であろう。とすれば，仏陀の居室の壁の回りには，経（sutta）や律（vinaya）その他の文書類が並べられていたと想像しても大過ないであろう。この光景は実は残る種々の諸問題を解決する有力なヒントを与えてくれるようである。

（キーワード） 仏説，経，記憶，文字化，速記